

特集

ここまでできる！
摂食・嚥下リハビリテーション

最近、経静脈に比べ、経口・経腸で適切な栄養を摂取することが、免疫能や自然治癒力を高めることが実証されつつあります。もとより、口から食べることは患者さんの楽しみや喜びにつながり、QOLを維持・向上するに違いありません。摂食・嚥下能は、適切な訓練を行なうことによって維持・回復が可能です。2006年の診療報酬改定でも、看護師等による「摂食訓練療法」加算が拡大されました。一方、その潜在能力も、放置すれば機能は失われるばかりです。今回は、一歩踏み込んだ摂食・嚥下支援の取り組みをいくつか紹介します。

脳梗塞に伴う重度嚥下障害への試行錯誤のアプローチ

持続的唾液吸引の工夫とOE法から傾向摂取自立まで 斉藤弘子

アルツハイマー病者への継続的なアプローチ

食べる機能を維持するための14年間の軌跡 白坂蒼子

超急性期患者さんへの戦略的なアプローチ NSTとのリンケージ 今田智美

摂食・嚥下訓練の一環としてのPEG 福本礼

【トピックス】「摂食・嚥下障害認定看護師制度」とは 浅田美江

招待席

改めて「いのち」と向き合う

患って気づいた看護の力

東野洋子さん

特別記事

シンポジウム「今を生きる障害者の現状と課題」 柳屋有里
みんなで取り組もう！新人看護師の学習サポート

石渡祥子・梅澤優子・北浦暁子・渋谷美香

連載

アフリカが紡ぐ命の物語・3——井上冬彦

from KOBE 「後輩」を育てる総合実習・6（最終回）——高田早苗ほか

患者になった旧友との往復書簡

「前略 小生、透析を始めました。」・6（最終回）——東めぐみ・中村厚

明るい肉体・11——天田城介

看護に役立つ！人体の神秘の世界へご招待

からだと病氣とミクロのはなし・12——近藤啓文

看護のアートをめぐるカフェ・トーク・12（最終回）——谷津裕子

周手術期の臨床看護判断を磨く 手術侵襲と生体反応から看護援助を

組み立てる・12（最終回）——鎌倉やよい・深田順子

悩めることも才能だ！宮子あずさのお悩み外来・15——宮子あずさ

看護学雑誌 第71巻第2号 2007年2月1日発行（毎月1回発行）

発行／株式会社医学書院 代表者 金原優

〒113-8719 東京都文京区本郷5-24-3

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 2007, Printed in Japan

1部定価 1,260円（本体1,200円＋税5%） 年ごめ予約購読料 13,200円（税込、送料弊社負担）

・定期購読のお申し込み先／（株）医学書院販売部 TEL 03-3817-5659

・第69巻以前のバックナンバーのご注文先／（株）東亜ブック TEL 03-3985-4701

「看護学雑誌」編集室（担当／鶴淵・大野・小田嶋） TEL 03-3817-5772

E-mail kangaku@igaku-shoin.co.jp 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権（送信可能化権を含む）は（株）医学書院が保有します。

JCLS <（株）日本著作出版権管理システム委託出版物>

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に（株）日本著作出版権管理システム（TEL 03-3817-5670、FAX 03-3815-8199）の許諾を得てください。本誌掲載論文・記事のタイトル頁最下段に記された「0386-9830/07/¥250/論文/JCLS」は、1論文1回複写につき250円を要することを明示したものです。これは表示のない論文等にも適用されます。JCLSへのご連絡の際には、筆頭著者名・論文名と併せて本表示をご掲示くださるようお願いいたします。

編集後記

●栄養の大切さが身にしみる特集でした。毎日新しい細胞を作り出し、人体の機能を維持するためには、どんな栄養素も欠かせないですね。しかし、低栄養状態に陥っている高齢者には、計算されつくした食事メニューを提供すれば解決、としないのが難しいところ。ここでNSTは、必要な栄養を手段を選ばず投与するのではなく、食事の形態や楽しみなども考慮し、患者さんの顔を見て栄養管理プランをアドバイスしてくれます。本特集では、栄養管理を要する患者さんを見極め、しかるべきチームに応援依頼し、実際に栄養管理を進めるのは、誰でもない一般ナースである、と明言されています。患者さんの早期回復だけでなく、ご自身の健康管理にも役立つ知識です。【鶴淵】

●「お客様のなかで、お医者様が看護婦さんはいらっしゃいませんか？」

映画で何度も聞いた台詞ですが、先日飛行機のなかで初めて実際に耳にしました。客室乗務員の案内で1人の女性が私の数列前の人のところに行って対応をしていましたが、特に大変な状況ではなかった様子で、ほどなく席に戻ってしまいました。

改めて感じたのは、せめて救急処置くらいはきっちり身につけておきたいものだったということでした。弊社にも消防署の研修を修了している人が少なくありませんが、私は大昔に知り合いの救急医に非公式に教えてもらったきり。これをきっかけに、次回は申し込もうと思いました。

しかし、一般的にはなかなか「看護師さん」とは言ってもらえませんね。【大野】

●早くもヒットメーカーとなった海堂尊さんのインタビューはいかがでしたか。中学から高校にかけては筒井康隆の全作品読破、阿佐田哲也の『麻雀放浪記』を繰り返し見たそう。レイモンド・チャンドラーも大好きだった。大学時代は濫読で、エラリー・クイーン、アガサ・クリスティーなどもひととおり読んだが、「全部忘れた」とのこと。私も「趣味は読書」というのも恥ずかしいが、読んだ片っ端から忘れてしまう。読んでいる間が楽しければいいや、と開き直っている。むしろ本を買うまでの瞬間が楽しいのであろう。買うことで満足し、読む行為はそれに付属した楽しみということであろうか。困った性分である。【小田嶋】